

## 梁山泊物語の成立について

—『水滸傳』成立前史—

小 松 謙

京都府立大學

梁山泊を根據地とした宋江とその配下の豪傑たちの物語は、今日では『水滸傳』によって廣く知られている。しかし、『水滸傳』がこの物語を伝える唯一の作品というわけではなく、すべての梁山泊物語が『水滸傳』と同じ内容を持つというわけでもない。『水滸傳』は、藝能の場でさまざまに物語られていた梁山泊物語がある一つの形にまとめられた姿を示しているにすぎないのである。

本論においては、『水滸傳』成立以前の梁山泊物語について考察することにより、『水滸傳』の成立過程について、一つの假説を示してみたい。<sup>①</sup>

梁山泊物語の成立について（小松）

### 一

實在の宋江が活動していたちやうどその時期に、北宋王朝は崩壊へと向かい、金と南宋の南北朝體制が成立する。そして梁山泊物語は、この南北兩國でそれぞれに語り伝えられていったものと思われる。しかし、全く別の國家であつた以上、兩國の間に頻繁な往來があつたはずもない。とすれば梁山泊物語は、金と南宋においてそれぞれ別個に發達していったに違いない。

現存する資料からは、宋江が梁山泊を根據としていたという事實を確認することはできないが、宮崎市定氏が指摘されるように、宋江を招安しようとした侯蒙が知東平府に任じられていることから考えて、その時点で宋江が梁山泊を少なくとも活動の據點の一つとしていた可能性は高そうである。相互にそれほど連絡があつたとは考えにくい金・南宋のいずれにおいても、宋江物語がすべて梁山泊を舞臺としていることは、實在の宋江が梁山泊と關係を持つていたこと、少なくとも當時からそのように認識されていたこ

とを示しているのではないかと思われる。

そして梁山泊は、山東東平府、つまり金の領域内にある。おそらく東平府周辺の地域では、梁山泊を根城として周辺の町や村を荒らしつつ、弱きを助け強きをくじく義賊の物語が、地元に着した形で語られていたのであろう。東平から金の文化的中心地であった南京開封までは、直線距離にして二百キロほどしかない。比較的近い地で廣まっていた江湖の世界の物語が、開封で演じられる藝能の中で發展していく可能性は高いであろう。金における梁山泊物語はこのようにして、現地と密着した物語として成長していったものではあるまいか。

では、南宋ではどうだったのであろうか。南宋における最も重要な藝能の場であった杭州臨安府は、山東からは遠く隔たっている。従って、ここで梁山泊の物語が語られる必然性はないはずである。おそらく臨安の人々にとっては、梁山泊自體が全く實感を持ってない場所だったであろう。

しかし、おそらく臨安における講談の状況を反映しているものと思われる『醉翁談錄』の「小説開闢」には、「花

和尚」「武行者」「青面獸」といった、明らかに梁山泊物語と關わるであろう題名が記録されている。なぜ南宋の都において、自國の領土に含まれない土地の物語が語られていたのであろうか。また、梁山泊物語の中でも特にこの三つの物語名があげられているのはなぜなのであろう。<sup>④</sup>

この點について論じるためには、まず臨安における藝能のあり方について考える必要がある。臨安ではどのような場で藝能が演じられていたのであろうか。

## 二

臨安における藝能の中心は、「瓦市もしくは瓦舍と呼ばれる盛り場であった。そして、『夢梁錄』卷十九「瓦舍」の記事によれば、それは次のような事情で設けられたものであった。

殿殿楊和王因軍士多西北人、是以城内外勑立瓦舍、招集妓樂、以爲軍卒娛戲之地。

殿前司都指揮使の楊和王は、將兵に西北の出身者が多かったので、城内外に瓦舍を創設し、妓女樂人を集

めて、兵士たちが休日には遊ぶ場としたのである。

つまり、元來瓦舎とは北方から来た軍人たちの娯樂施設として設けられたものだったのである。北方であること、そして軍人であること、この二點は注目に値しよう。

北方人であるとすれば、當然そこで扱われる内容も北方系のもが主體となる可能性が高いはずである。そして、軍人対象であれば、軍人の世界と關わる藝能が多かつたに違いない。ただ、『夢梁錄』によれば北方といつても東北ではなく西北であり、梁山泊とは方向が異なる。ここで注目されるのは、この瓦舎の主催者が「楊和王」だったことである。

以前に詳しく論じたように、楊和王とは楊存中(5)（または沂中）という人物のことである。楊存中は、確かではないものの楊家將の一族ではないかといわれ、山西省北部にあたる代州の出身で、對金戰の中で一族を失った身であった。そして代州は、五臺山の所在地である。

これらの地名・人名は、『水滸傳』の内容のある部分と深く關わるものである。『水滸傳』における五臺山は魯智

梁山泊物語の成立について（小松）

深が出家した場所であった。また、『水滸傳』の楊志は楊家將一族の出身とされる。『水滸傳』における魯智深と楊志は、元來格別關係を持つていなかったにも關わらず、突然めぐりあい、ともに二龍山を乗っ取って頭領に收まるといふ、いわばコンビを組む關係にある。そしてそれ以上に重要なのは、この二人だけが『水滸傳』において「洒家」という一人稱を使用するという事實である。

「洒家」については、「北方方言」「關西方言」といった説明がなされるのが常であるが、詳細は明らかではない。ただ、元雜劇では「薦福碑」「虎頭牌」に樸訥な「關西曳刺」（兵卒身分の下役のことだが、演劇では通常關西出身の粗暴だが率直な人間としてキャラクターが固定している）が登場して「洒家」という一人稱を用いていることから考えて、白話文學においてはその人物が武骨な北方人であることを示すためのいわば記號として用いられているように思われる（元雜劇における「關西」は、「單刀會」をはじめとする多くの雜劇において關羽と關係して用いられることから考えて、陝西・甘肅だけではなく、山西をも含むようである）。無論、北方人

自身がこうした記號を要求するはずはない。つまり、逆にいうとこの語は、武骨な北方人以外の世界において用いられることが多かつたに違いない。

右にあげた事例は、いずれも元代北方における雜劇（雜劇のセリフが成立した時期を確定することは困難であり、元から明にかけてというべきかもしれない）のものであるが、南宋においても事情は同じだったらしい。戲文『張協狀元』第五十一出<sup>⑥</sup>に登場する「關西人」の譚節使というやはり樸訥な軍人が「酒」という一人稱を使用しているという事實は、この作品が南宋から元にかけての時期に温州で上演されていたものと思われるからすれば、南宋もしくは元代の舊南宋領域においてこの語が武骨な北方人（もしこの戲文が南宋期に成立したものであるとすれば、日常的に北方人に接する機会がない以上、それは非常に概念化されたものだったに違いない）を象徴するものとして用いられていたことを示すものであろう。

つまり、『水滸傳』における魯智深と楊志は、ともに「關西人」という記號を背負ったキャラクターであった。

そして魯智深は楊存中の出身地の名山である五臺山と結び付けられ、楊志はおそらく楊存中がその一員と稱していたであろう楊家將一族の出身とされる。つまり、この二人に限っていえば、梁山泊物語は西北の物語といつて差し支えないことになる。一方で「青面獸」「花和尚」は、梁山泊との關係を切り離してしまえば、西北人を主人公にした二つの物語ということになる。

更にもう一つ注目されるのは、楊志が實在の人物と思われることである。

宋江と同時代に楊志という人物が存在したことは、つとに余嘉錫氏によつて指摘されている通りである。<sup>⑦</sup>この名前自體はそれほど珍しいものではないが、同じ時代に、同じ地域で、同じような來歴を持つ同姓同名の人間である以上、兩者に關係がある可能性は非常に高いといつてよからう。

『三朝北盟會編』卷四十七によれば、實在の楊志は「招安巨寇」で、太行山周邊で金と戦つた武將の一人であつた。同書における楊志の評判は至つて芳しくなく、卷三十に引かれた沈瑄が李綱に送つた手紙には、「楊志昨在燕會受高

托山極賂、志貪財色、今聞在軍。可說之要擊（楊志は以前に燕で高托山〔群盜の巨魁〕から大變な賂賂を受けたことがあります。楊志は金と女に汚い男ですが、今は軍中にいるとか。説きつけて攻撃させるのがよいでしょう〔?〕）とある。最後のくだりについて、誰に説いて誰を攻撃させるのがよくわからないものの、彼が士大夫から信賴されていなかったことは見て取れよう。そして同書卷四十七によれば、楊志は決戦にあたり、戦わずして間道から逃亡し、そのために宋軍は大敗したという。

楊志が高托山から大量の贈り物を受けたというのは、おそらく「賊」同士の関係によるものであろう。つまり、彼は招安を受けたものの、「賊」との関係は失っていないからなのである。敵前逃亡をしたというのも、あるいは官僚や正規軍との関係がよくなかったことに由来するのかもしれない。

ともあれ、実際にどのような人物であったかはともかく、招安を受けた「賊」で、太行山で金と戦った楊志という人物が實在した。そして『大宋宣和遺事』の梁山泊物語は、

梁山泊物語の成立について（小松）

花石綱の運搬に失敗した末に殺人を犯してしまった楊志が、結局李進義以下とともに太行山で賊になる話から始まる。『水滸傳』において、他の花石綱メンバーが太行山との関係を失っても、楊志だけはこの物語を背負い続ける。これは、楊志と太行山の関係の深さを物語るものである。また、魯智深が出家した五臺山の僧侶が對金レジスタンスに参加していたことは、すでに松浦智子氏が指摘しておられる通りである<sup>⑧</sup>。

以上の事實を踏まえた上で、臨安の瓦市で「青面獸」と「花和尚」の物語が語られていたことの意味を考え直してみよう。臨安の瓦市の支配者は楊存中であつた。彼は、五臺山の所在地である代州の出身で、金との戦いで勇名を馳せた武將であり、楊家將の一族と稱していた可能性が高い。そして、瓦市は楊存中配下に屬する西北出身の軍人たちのために設けられていた。そこで語られていた内容は西北に關わるもの、特に金との戦いを題材としたものが多かったであろう<sup>⑨</sup>。彼ら軍人たちの主將である楊存中の一族の物語、つまり楊家將物語がこの場で發達した可能性については、

以前に論じた通りである。<sup>⑩</sup>

とすれば、やはり楊姓である楊志という人物が太行山で金と戦う物語も、この藝能の場の題材となりうるのではない。そして、梁山泊のメンバーだった魯智深を、やはり楊存中の出身地に位置し、金と戦った僧侶を輩出した五臺山と結び付けることも、この臨安の瓦市で生じたものなのではないか。『大宋宣和遺事』における魯智深は、突然現れて梁山泊のメンバーに加わることになっている。これは、彼が全く別の話を背負っていたことを意味するものではないからうか。

このように考えると、「青面獸」の物語が元來梁山泊物語に屬するものであったかについても疑問が生じてくる。招安を受けて方臘と戦う梁山泊の宋江と同様に、招安を受けて金と戦う太行山の山賊楊志の物語が獨立して存在したのではないかとすれば、『水滸傳』における奇妙な矛盾も説明可能になる。

### 三

『水滸傳』第十二回<sup>⑪</sup>において、北京大名府に配流された楊志は、北京留守の梁中書に目通りする。高俅に復職を拒まれ、金に困って刀を賣ろうとしたところ、ごろつきの牛二にからまれて殺してしまったというそれまでのいきさつを楊志が説明すると、梁中書は次のように反應する。

梁中書聽得大喜、當廳就開了枷、留在廳前聽用。

梁中書はこれを聞くと大變喜んで、その場で枷を外させると、自分の側近として用いることにしました。

更に、楊志のまじめな勤めぶりを見込んだ梁中書は、彼を副牌軍（副隊長か）に取り立てようとするが、いきなり地位を與えては他の軍人が納得するまいと考えて、演習の場で腕を示させようとする。楊志は副牌軍の周謹を打ち負かすが、正牌軍の索超が納得せず、今度は索超と戦うことになる。すると梁中書はこういう。

就叫牽我的戰馬借與楊志騎、小心在意、休觀等閑。

そこで命ずるには、「わしの戰馬を牽いてきて楊志

に貸してやれ。心するのだ、油断はならんぞ」。

そして、素超と互角の腕前を披露して、當初の豫定より高い地位に取り立てられることになる。

このくだりを讀む限り梁中書は、人物を見抜く眼力を持ち、不運な豪傑を極めて好意的に遇してくれる度量の廣い名将であるように見える。

ところが、この後は思いがけない展開が待ち受けている。

即ち、有名な生辰綱の物語である。楊志は梁中書に命じられ、梁中書の妻の父である蔡京のもとに誕生祝いを届けることになるが、晁蓋以下の面々に誕生祝いを強奪されてしまふ。その結果、楊志は梁中書に合わせる顔がなく、やむなく魯智深とともに二龍山を乗っ取つて山賊になるという展開をたどるわけだが、問題は蔡京が貪官汚吏の代表とされていることである。従つて、その娘婿に當たる梁中書も貪官ということになり、事實誕生祝いは晁蓋の一黨から何度も「不義之財」と呼ばれている。

これは、楊志を引き立てようとする場面の梁中書とは全く矛盾した人間像といふべきであろう。しかも、先に引い

梁山泊物語の成立について（小松）

たように梁中書は楊志の身の上話を聞いて「大喜」するわけだが、その内容は高俅に不當な扱いを受けたと訴えるものであつた。『水滸傳』の世界では、奸臣グループはいわば一心同體の運命共同體を形成しており、蔡京と高俅の間に矛盾は存在しない。とすれば、やはり蔡京と一心同體であるはずの梁中書が、高俅を非難する言葉を聞いて「大喜」とするというのは、非常に不自然といわざるをえない。なぜこのようなことが起こるのであろうか。

隋唐を題材とする『隋史遺文』『隋唐演義』『説唐全傳』という三つの小説がある。この三篇相互の關係については、以前に詳しく論じたことがあるが、<sup>⑩</sup>簡單に言えば、三者は同じ源から出た兄弟ともいふべき間柄にあり、いずれも前半は秦叔寶の物語を中心に進んでいく。秦叔寶は實在する唐の建國の功臣だが、これらの小説においては、あたかも『水滸傳』の宋江の如く、江湖に名高い豪傑とされておられ、宋江同様、さまざまな苦難にあつて各地を流浪するうち、多くの豪傑と結びつくという、いわば狂言回しの役割を與えられている。そうした流浪の過程で、『隋史遺

文』でいえば第十五回において、幽州に配流された秦叔寶は幽州總管（『說唐全傳』では、隋の中にあつて事實上の獨立を容認されている燕公）羅藝のもとに赴くことになる。對面してみると、羅藝の妻が秦叔寶の叔母に當たることが判明し、羅藝は秦叔寶を取り立てようとするが、いきなり地位を與えては他の軍人が納得するまいと思ひ、演習の場で腕を示させようとする。

一見して明らかかなように、隋唐物語のこのくだりは、さきに見た『水滸傳』第十二回と酷似している。『水滸傳』の影響力の強さを考慮すれば、隋唐物語が『水滸傳』に影響された結果と見るのが常識的な判断かもしれない。しかし、別に論じたように、秦叔寶の物語も起源はかなり古いものと思われる。その點から考えれば、この類似は直接の影響關係によるものではなく、むしろ同じ類型が別々の物語に登場している可能性の方が高いかもしれない。

少なくとも、設定が自然なのは隋唐物語の方である。羅藝はすぐれた武將とされておられ、しかも秦叔寶の義理の叔父である以上、彼を取り立てようとするのはごく自然なこ

とといつてよい。これと比較すれば、貪官汚吏のはずの梁中書が、突然現れた楊志にむやみに肩入れする『水滸傳』の不自然さは明らかであろう。

「青面獸」の物語が、本來獨立した物語であり、たまたまそれが『水滸傳』の中に取り入れられたものであるとすれば、この問題は説明可能であろう。別に論じたように、『醉翁談錄』では「青面獸」は「朴刀」という分類に入れられており、同じ分類に屬する話には「楊令公」など、甲冑を着けた武將が騎馬で戦う物語が多いことから考えても、「青面獸」が『水滸傳』における大名府のくだりと同じ内容を保持していた可能性は高そうに思われる。「青面獸」の中に、何らかの理由で流罪に處された楊志が配流先で司令官から認められるという展開が存在し、それがそのまま『水滸傳』に取り込まれたのだとすれば、矛盾が生じた理由も明らかになる。物語を丸ごと導入した結果、「青面獸」における司令官の性格（當然善玉であつたであろう）がそのまま梁中書に當てはめられたために、悪役のはずの梁中書が極めて好意的な人物として描かれてしまい、『水滸



傳』内部で矛盾が生じたのではなからうか。

この推定が正しいとすれば、「青面獸」は元來梁山泊物語の一部ではなく、太行山の楊志を主人公にした獨立した物語だったことになる。その内容は、楊志という豪傑が何らかの事情で罪を犯してアウトローになるが、招安を受けて官軍に参加し、太行山一帯で金の軍勢と戦うというものだったと推定される。その物語のいずれかの段階において、配流先でしかるべき將軍に認められ、官軍の將校に取り立てられるという展開があったのであろう。その將軍は、實在の楊志の上級司令官だった種師中かもしれない。『水滸傳』において、特に魯智深と絡む形で老・小二人の「種經略相公」が言及されることは、種氏一族と西北系の梁山泊につながる物語が関わることを示すものと思われる。『三朝北盟會編』によれば、實際には楊志の敵前逃亡の結果、種師中は命を落とすことになるのだが、楊志主體の物語においては、そうした問題は回避されていたであらう。

梁山泊物語の成立について（小松）

#### 四

以上のように、臨安の瓦市では北方の物語が語られていた。わけても、瓦市の支配者である楊存中と地縁的に關わる物語（「花和尚」と、血縁的に關わる物語（「青面獸」）は、おそらくそれぞれ獨立して語られる物語であった。もう一つ、『醉翁談錄』において名があげられている「武行者」については、詳細は不明ではあるものの、『水滸傳』における武松の物語、いわゆる「武十回」が非常に獨立性の高いものであることから考えて、やはり獨立した話であった可能性が高からう。實際、同じように『醉翁談錄』に見える「李從吉」「攔路虎」「徐京落草」の主人公と思われる李從吉・楊溫・徐京の三人は、『水滸傳』第七十八回において、梁山泊を攻撃する「十節度使」のメンバーという非常に中途半端な形で、やはり『水滸傳』に取り込まれているのである。そして、楊溫も楊氏同様楊家將の一族とされる。<sup>⑩</sup>

「青面獸」「花和尚」「武行者」は、より本格的に取り込まれたというだけのことなのではないか。

一方では、こうした個別の講談とは別に、大規模な梁山泊の物語が語られていたであろう。『醉翁談錄』にその形跡が見えないのは、これが「小説開闢」だからではなからうか。「小説」が何であるかについては諸説あるが、『東京夢華錄』『都城紀勝』『夢梁錄』では「講史」とはつきり區別されており、『醉翁談錄』に列擧されている題名から見ても、読み切り、もしくはそれに近い短いものだったのではないかと推定される。宋江を中心とする梁山泊の物語は、おそらく延々と續く長篇語り物だったのであろう。

南宋においても梁山泊物語が廣く知られていたことは、周密の『癸辛雜識』續集卷上に引く龔聖與の「宋江三十六贊」からも明らかであろう。龔聖與は南宋滅亡前後の人物であるが、その序には先輩の畫家李嵩も梁山泊の豪傑を題材にしたとあり、李嵩が活動していた南宋中期にはすでに宋江たちの物語は周知のものだったようである。自國の領域内にはない北方を舞臺とした梁山泊物語が南宋で廣まっていたのは、おそらくやはり臨安の瓦市が北方人のために設置されたものであったことに由來する可能性が高からう。

北方の軍人向けに、彼らの間で傳承されていた江湖の人々の物語が語られ、それが瓦市に集まる軍人以外の人々の間にも廣まっていた結果、梁山泊物語が南宋でも展開することになったのではなからうか。

では、その内容はどのようなものだったのであろう。おそらく、南宋で行われていた梁山泊物語にもさまざまなバリエーションがあったに違いない。「宋江三十六贊」が、南宋末（李嵩が描いた三十六人も同一であったとすれば、南宋中期までさかのぼることができよう）におけるパターンの一つを反映していることは確實であろう。ただ、残念ながらそこに付された「贊」はあまりにも曖昧模糊としており、その詳細は明らかではない。

『水滸傳』成立以前の梁山泊物語を具體的に傳える文獻としては、『大宋宣和遺事』が最も重要なものであることはいうまでもない。『大宋宣和遺事』は、さまざまな文獻をつなぎあわせて徽宗皇帝の一代記を綴っていく讀み物（文獻としての性格がはっきりしないため、あえて「小説」という語は用いない）であるが、その成立年代については南宋

から明に至るまでの諸説があり、はっきりしたことはない。そこに見える梁山泊物語は、前後とは文體を異にした獨立したまとまりであり、明らかに藝能（もしくはその模倣）のスタイルを取っている。つまりここには、當時の藝能で演じられていた内容をある程度反映した物語が挿入されているものと思われる。では、その藝能とはいつどこで演じられていたものなのであろうか。

これについても諸説あるが、『大宋宣和遺事』自體の成立年代がいつであれ、そこに含まれる梁山泊物語の基本的な枠組みは、おそらく南宋において行われていた藝能の内容を反映したものであろう。そのことを示唆するのが、金・元から明初に至る北方における梁山泊物語のありようである。

## 五

先にも述べたように、梁山泊は開封から比較的近い位置にあった。宋江たちの活動が終わってから十數年後に金が北宋を打倒すると、開封は、楚・齊という傀儡國家の支配

梁山泊物語の成立について（小松）

を経て、金の領域に入り、經濟・文化の両面において、北中國の中心都市であり續けた。従つて、金代の開封を中心とする地域、更には梁山泊の地元である東平などの都市においては、梁山泊の物語が語られていたものと思われる。

この點については、残念ながら金代の資料の中に梁山泊物語にふれたものがないため、確實なことはいいがたいのだが、續くモンゴル・元の時期（以下便宜上まとめて元代と呼ぶ）の状況は、金代においてすでに梁山泊物語がある程度發展していたことを示しているように思われる。

元代には梁山泊の好漢を主人公にした雜劇が多數作られた。これらいわゆる「水滸雜劇」については、別に論じたことがあるが、<sup>15</sup>簡単に紹介すれば、『録鬼簿』『録鬼簿續編』に見える元から明初までの作家の手になる雜劇のうち、題名から梁山泊物と推定されるものは十八種（うち現存するもの三種）であり、他に作者不明ながら明初までに成立したと思われる梁山泊物雜劇が三種残されている。

これらは元から明初にかけて成立したものはあるが、その作者はいずれも北方人であり、當然ながら北方人の觀

客を想定して、北方で傳承されている物語をもとに作られたものと思われる。その内容が南宋における藝能の影響を受けていることは状況的にもほとんど考えられまい。まして、『録鬼簿』に記録されているような前期の雜劇の中には、南宋滅亡以前に成立した可能性があるものも含まれている。この場合、交戦關係にある敵國のものである以上、南宋における梁山泊物語が北方の雜劇に影響すること自體、まずありえないといつてよからう。つまり、こうした雜劇が存在するという事實自體が、先立つ金の時代に、北方でもある程度梁山泊物語が成長していたことを物語っているのである。そして、さきにも述べたように、南宋・金の双方で梁山泊における宋江一統の物語が成長していたという事實は、當時の資料にこそ記述がないものの、實在した宋江三十六人が梁山泊とかなり深い關係を持っていたことを示しているよう。

これらの雜劇の内容は、興味深いことに、『水滸傳』とほとんど合致しない。現存するもので唯一合致するのは康進之の「李逵負荆」だが、これは、この物語が見える第七

十三回周邊は『水滸傳』でも埋め草的な部分であることから考へて、『水滸傳』の方が雜劇の内容を取り入れた可能性が高いものと思われる。これはなぜであろうか。

原因の一つは、これらの雜劇の多くが、黒旋風李逵を主人公とした笑劇である點に求められよう。別論文で詳しく論じたように、これらの雜劇は李逵が不似合いな狀況に置かれた結果生じるおかしさをねらつたもので、登場人物こそ梁山泊のメンバーであろうが、梁山泊物語と直接の關係を持つものではない。<sup>⑦</sup>

しかし、梁山泊の好漢による悪人退治を描く他の雜劇の内容も、『水滸傳』とは全く一致しないのである。しかも、豪傑のキャラクターも大きく異なる。そもそも李逵にしてからが、「李逵負荆」においては風流心を、「双獻功」においては思慮分別と狡知を具えたものとされており、ひたすらに粗暴な『水滸傳』における李逵とはかなり性格を異にするのだが、これはまだ差が少ない方といつてよい。「燕青博魚」における燕青は「大漢（大男）」であり、性格的には格別の特徴を持たず、小柄で諸藝に通じた、目から鼻

に抜けるような才覚の持ち主である『水滸傳』の燕青とは全く異なる。更に、「争報恩」に登場する三人に至っては、關勝は金に困つて大肉を賣り、徐寧は物乞いとなり、花榮は服が風にめくられて露出した短刀を警官に見とがめられて逃亡するという、いずれも全く情ない登場の仕方であつて、『水滸傳』における關勝の儒將らしい重々しさや、花榮の颯爽たる若武者ぶりとは天地の差といつてよい。

これはなぜであらうか。右にあげた李逵以外の四人相互の間にもキャラクターの違いがほとんど認められない點からすれば、雜劇においては、そもそも三十六人について、李逵のような特別な存在を別にすれば、個々の好漢の個性自體が定まっていなかつたように思われる。つまり、雜劇の背景をなすであらう金から元の前期にかけて成長した北方系の梁山泊物語は、『水滸傳』とは大きく異なる性格を持つていたのではないかと推定されるのである。

この事實と、『水滸傳』の大枠が『大宋宣和遺事』と合致するという事實を結び付ければ、『大宋宣和遺事』は北方系の物語に基づくものではない、つまり南宋系の梁山泊

物語の一形態であるという結論が導き出されよう。しかも、梁山泊物語雜劇が『大宋宣和遺事』及び『水滸傳』とは別系統に屬することを示す更に明確な事例が存在するのである。

「還牢末」という雜劇がある。これも李逵が登場する雜劇の一つであるが、他とは異なり、李逵は正末ではなく、重要性も薄い。ここで注目されるのは、劉唐と史進という二人の好漢が登場することである。劉唐は、『大宋宣和遺事』『水滸傳』のいずれにおいても、いわゆる生辰綱の事件、つまり蔡京の誕生祝い強奪の犯人の一人である。史進は、『水滸傳』では百八人中最初に登場する好漢であり、陝西の豪農の息子ということになっているが、『大宋宣和遺事』においては、三十六人の名簿に名が見えるのみで、詳細は不明である。ところが、「還牢末」における二人は、全く異なつたキャラクターとして登場する。ここでは二人はともに東平府の五衛都首領、つまり胥吏である。しかも劉唐は、休暇の期限に遅れた時、この雜劇の正末である上司の李榮祖がごまかしてくれなかつたことを逆恨みして陥れようとする悪人であり、史進は李・劉兩人の間でまごま

ごするだけの主體性のない男とされている。

つまり兩人とも到底好漢とはいいがたい人物であり、この雜劇の最後で李逵に連れられて梁山泊に仲間入りするところが理不盡にすら感じられる。これは一見すると、たとえば「酷寒亭」のようなよく似たストーリーを持つ雜劇の類型を無理矢理梁山泊に當てはめた結果のように思われるが、すでに王利器氏以來しばしば指摘されているように、實は⑩  
そうではないのである。「水滸傳」第六十九回において、宋江が東平府を攻撃しようとした際、史進は「小弟舊在東平府時、與院子裡一個娼妓有染、喚做李瑞蘭（私が以前東平府におりました時、色街の妓女となじみになりました。名を李瑞蘭と申します）」という。「水滸傳」においては、これ以前に史進が東平に來る機會はなかつたはずであり、これは不自然なセリフといわざるをえない。しかし、「還牢末」と並べてみれば、その疑問は氷解する。つまり、この部分には雜劇における、つまりは北方系の史進の履歴が顔をのぞかせているのである。これは、金において成長したであろう梁山泊物語が、「大宋宣和遺事」「水滸傳」とは基本的

に性格を異にするものであったことを示していよう。

北方で知られていた梁山泊物語が「水滸傳」とは大きく異なるものであったことを示す更に顯著な事例がある。明代前期、宣德八年（一四三三）に刊行された周憲王朱有燾の雜劇「豹子和尙自還俗」である。太祖朱元璋の孫に當たる周憲王が著した一連の雜劇は、作者自身によって確定された刊行年代が明らかなテキストを傳えるという點で演劇史上非常に重要な意味を持つ作品群であるが、また梁山泊物語の發展に關わる資料としても貴重な存在といつてよい。「豹子和尙」とは魯智深のことである。そして、ここに登場する魯智深は、「水滸傳」とは全く異なる素性と性格の持ち主である。彼の自己紹介を見てみよう。

貧僧姓魯、俗名智深、原是南陽廣慧寺僧人。因幼年戒行不精、被師噴責、還俗爲民、根着宋江哥哥、在梁山瀨内、落草爲寇。帶着我親母、如今年老、朝夕奉侍。拙僧は姓は魯、俗名は智深、もともとは南陽の廣慧寺の僧でありました。若い頃、戒律をしつかり守らな  
いということ、お師匠様に叱られて、還俗して僧籍

を抜け、宋江あにきの配下で、梁山泊にて山賊となりました。母を連れておりますが、年を取ってしまいましたので、朝な夕なにお世話しております。

出身地は山西や陝西ではなく河南の南陽であり、智深は法名ではなく俗名、還俗して賊となったということは、僧侶ではなく、母もいる。更にこの雑劇には魯智深の妻子も登場する。しかも、ここで魯智深は、宋江に四十回打たれたことを根に持ってまた出家するのだが、宋江に打たれた理由は「擅自殺害了平人（勝手に罪もない者を殺した）」というものであった。

つまり、「豹子和尚」における魯智深は、『水滸傳』に見えるような、天涯孤獨の身で、酒や肉こそ好むが、決して無意味な殺人は犯さない出家である魯智深とは、全く異なるキャラクターなのである。

「豹子和尚」の最初にも三十六人の名簿があり、その内容が『大宋宣和遺事』に非常に近い点からすれば<sup>⑧</sup>、両者は同系統にあるとも見えるが、おそらく文字の形になった名簿として、『大宋宣和遺事』のそれと同一もしくはそれと類

梁山泊物語の成立について（小松）

似したものが存在したため、利用しただけである可能性が高かるう。「豹子和尚」が北方系に属することを示唆するのは、魯智深の出身地が南陽になっていることである。

周憲王の雑劇は彼の王府、つまり周王府で上演されていた。そして、周王府の所在地は開封であった。つまり、金代の開封において地元に着した形で梁山泊物語が發展したというさきの推定が正しいとすれば、周憲王はその中心地で雑劇を作り、上演していたことになる。そして、「豹子和尚」で魯智深の出身地とされる南陽は、開封と同じ河南に属し、開封府と南陽府は境を接して隣り合う關係にある。つまり、西北の軍人を中心とする臨安の瓦市で形成された魯智深像が山西五臺山と關わりを持つものであったのと同じように、河南で知られていた魯智深は河南の人間とされていたのである。おそらく北方、少なくとも河南一帯の梁山泊物語における魯智深は、こうした履歴を持つものと考えられていたのであろう。

更にもう一つ、「梁山五虎大劫牢」という雑劇の存在も注目される。明の宮廷演劇のための上演用臺本と考えられ

る内府本のみが傳わることから見て、おそらくこの雜劇は明の宮廷における上演用として制作されたものと思われる。<sup>②</sup>この雜劇の正末は三十六人の一人李應だが、そのキャラクターは『水滸傳』とは大きく異なっている。『水滸傳』第四十七回に登場する李應は、李家莊の主である富農で、年齢などは明記されていないが、彼とトラブルを起こした祝家莊の三男祝彪を「口邊奶腥未退、頭上胎髮猶存（口の乳のおいも取れず、頭の産毛も残る）」の若造と罵り、祝彪の父と生死の交わりをかわしたといっているところから考えて、あまり若くはなく、威嚴のある人物と考えるべきであろう。ところがこの雜劇における李應は、第一折の宋江のセリフによれば「此人年小聰俊（この者は若くて頭の回転が速い）」というキャラクターであり、第二折では韓伯龍からも「一箇好年小聰俊後生」と呼ばれている。「聰俊」とは、賢くて粹なことであり、つまりこの雜劇における李應は、『水滸傳』における燕青と同じようなキャラクターを持つことになる。<sup>③</sup>一方、『燕青博魚』における燕青は、前述の通り大男とされており、両者のキャラクターは『水滸

傳』とはほぼ逆になっているのである。

明の宮廷演劇においては、民間では雜劇がすたれてからもずっと北曲の雜劇が使用され続けてきた。これは、元の宮廷で上演されていた劇種である雜劇を、いわば式樂として引き継いだためであろう。周憲王が雜劇ばかり多数制作したのも、そうした流れの上で理解すべきことである。その内容は、おそらく北方で受け継がれてきたものであったに違いない。李應のこうしたキャラクターも、北方系梁山泊物語の流れに屬するものと考えられるであろう。演劇の世界ではそうした李應像が存在したためか、視覺的イメージは残ったように、容與堂本『水滸傳』第四十七回の挿繪に登場する李應は、若々しい二枚目の姿に描かれている。このように北方では、登場人物の名前こそ共通するものの、内容的には『水滸傳』とは全く異なる梁山泊物語が成長していた。その特徴は北方で育ったこと、つまり梁山泊という土地と密着して成立・展開した點にある。一連の梁山泊物語の半分以上を作った高文秀は東平の生員であった。つまり、彼は梁山泊のお膝元で活動し、地元



説を演劇化していたことになる。元代における東平は、特にその前期においては、モンゴル政府から半獨立の統治權を認められたいわゆる漢人世侯の中でも最大のものの一つである嚴氏の本據地であった。ここで事實上の獨立政權を築いていた嚴實は、軍人ではあるが文化に理解があり、元代における東平は北方屈指の文化都市であった。こうした東平の文化的優位が、梁山泊物語が北方において成長・擴散する要因の一つであったのかもしれない。先に見たように、「還牢末」における劉唐と史進は、この東平府の胥吏とされていた。高文秀はこの地で活躍していた生員、つまりあまり身分の高くない知識人だったのである。そして先に見たように、「豹子和尙」と、更にもう一つ「黒旋風仗義疎財」という梁山泊物雜劇を書いた周憲王朱有燉は開封の王であった。このように地元の作者の手になり、地元で上演されていたであろう雜劇が多いという事實は、北方の梁山泊物語が東平・開封という物語の主要な舞臺と密接な關係を持って發達してきたことを示すものであろう。

雜劇の内容も地元との密着を示唆する。これも別に論じ

梁山泊物語の成立について（小松）

たところであるが、<sup>②</sup>黒旋風物の笑劇を別にすれば、現在内容が分かっている雜劇は、いずれも梁山泊から出た好漢が、外の世界で事件を解決して戻ってくるという構造を持つ。

詳しくいえば、危地に置かれた好漢が外部の人間に救われ、後に恩人の危機を救つて恩返しをするというパターン（「燕青博魚」「還牢末」「爭報恩」と、悪人に苦しめられている人間に出會つた好漢が悪人を退治するというパターン（「李逵負荊」「黃花峪」「仗義疎財」の二つに大きく分かれる（「双獻功」は兩者の中間にあたる）が、ともあれそれらの雜劇における梁山泊は安定した永續的な集團であり、好漢たちはそこから離れて事件を解決し、また戻っていくのである。これは、好漢たちの集結過程、つまりは梁山泊の成立過程を描く『大宋宣和遺事』や、成立と崩壊ばかりを描く『水滸傳』とは根本的に違つた視點であろう。

これは、雜劇の基本となつた北方系の梁山泊物語の性格と關わるものであろう。北方、特に東平や開封では、梁山泊はどこにあるとも知れぬおとぎ話の國ではなく、具體的に、目の前にある存在であった。従つて、そこに多くの好

漢が集結し、官軍も手を出せないユートピア的な世界を作りあげるといふ大きな物語、ほとんど幻想ともいふべき世界は出現すべくもない。ただ、地元の人々は身近な世界にいる「義賊」が、自分たちに降りかかった不正を解決してくれることを期待する。救いの神として絶望的な現実から救い出してくれる英雄は、問題が解決すれば、自分たちを巻き込むことなく、後腐れのない形で消えてくれるのが一番ありがたい。梁山泊はそうした英雄が出現し、吸い込まれていく場として存在する。従つて、物語は類似したパターンの繰り返しであり、好漢は強い男というだけで、格別の個性を持たない。これは、梁山泊物語に限らず、世界各地にある義賊傳説に共通したパターンであろう。

このように、金・元期に形成された北方の梁山泊物語は、南宋において形成された南方のそれとは全く性質を異にするものであった。この點から考えれば、『大宋宣和遺事』に見える梁山泊物語は、南宋で成長した物語の系統に屬する可能性が非常に高いことにならう。北方では主役である李逵が、『大宋宣和遺事』においてはまことに影の薄い存

在であることは、そのあらわれではないかと思われる。

## 六

『大宋宣和遺事』は楊志の物語から始まる。楊志・李進義・林冲・王雄・花榮・柴進・張青・徐寧・李應・穆横・關勝・孫立の十二人が花石綱運搬の「指使」に任じられ、義兄弟の契りを結ぶが、楊志は潁州で孫立を待つうちに路銀がなくなり、持っていた寶刀を賣りに出したところ、チンピラにからまれて相手を斬つてしまふ。衛州の軍城に配流される楊志に出會つた孫立は、開封に行つて李進義たちと相談し、護送の軍人を殺して楊志を救出すると、みなで太行山に行つて「落草」する。ここまでが第一段である。

つまり、『大宋宣和遺事』は楊志の物語から始まる。そして彼らは太行山で「落草」、つまり山賊になる。實在の楊志が太行山で金の軍勢と戦つた「招安巨寇」だつたことは先に述べたとおりである。このことを踏まえて考えれば、『大宋宣和遺事』のこの部分は、元來梁山泊とは無關係な、獨立した太行山の物語、つまり臨安の瓦市において、「青

面獸」を中核に成長した太行山の楊志の物語だったのでないかと思われる。

この推定が正しいとすれば、ともに名の上がっている十人は、元來は楊志物語の登場人物だった可能性が高いことになる。ただし、梁山泊物語と合流した際、宋江のメンバーのうち独自の物語を持たない者をこのグループに入れた可能性も否定はできない。實際、「宋江三十六贊」の「贊」において太行山に言及されている盧俊義・燕青・張横・戴宗・穆横のうち、この十一人に含まれるのは盧俊義（李進義）と穆横だけである。<sup>②</sup>つまり、楊志・盧俊義・穆横以外については、太行山のメンバーはあまり固定していなかったとみるべきであろう。

楊志たちが太行山に落草したことを述べた後、『大宋宣和遺事』は一轉して、北京留守梁師寶が蔡太師、つまり蔡京に贈る誕生祝いを晁蓋たち八人組が強奪する物語になる。これは、いうまでもなく『水滸傳』に見える生辰綱の物語とほぼ同じ展開であり、『大宋宣和遺事』が『水滸傳』と直接的な關係を持つことを示すものであろう。強奪グルー

梁山泊物語の成立について（小松）

プのメンバーも、晁蓋・吳加亮（『水滸傳』の吳用であろう。以下括弧内は同じ）・劉唐・阮進（阮小二）・阮通（阮小五）・阮小七は『水滸傳』と一致しており、『水滸傳』では『大宋宣和遺事』の秦明・燕青がいなかったわりに公孫勝が入っている點が異なる程度で、ほぼ共通する。その後、鄆城縣の押司だった宋江がひそかに晁蓋に捕り手が来ることを知らせて、晁蓋が逃亡に成功するというところも、捕り手が董平であることを別にすれば『水滸傳』とほぼ一致しており、兩者の關係が密接であることは明らかといつてよい。そして、やはり『水滸傳』と同様、晁蓋たちは「落草」することになるのだが、その行き先は「梁山泊」ではなく「太行山梁山泊」である。

これは、『大宋宣和遺事』が南宋で成立した物語の系統に屬することを示すものといつてよからう。太行山は山西、梁山泊は山東に位置し、遠く隔たる以上、地元の間、たとえば開封や東平の住人の手になるものであれば、このような不可解な地名が登場するはずがない。つまりこれは、北方の地理をほとんど知らない人々の間で成立した物語で

あることになる。しかも、假に南方で成立したとしても、明や南宋併合後の元であれば、ここまで北方に無知であるとは考えがたい。自國領ではない山東や山西のことを全く実感できない南宋において成立した話とすれば、このような現象も説明可能となる。南樂縣であるべき誕生日強奪事件の發生地點が「南洛縣」と誤っていることも、やはりこの付近の地理に不案内な人間がこの話をまとめたことを思わせる。

では、なぜこのような不思議な地名が現れるのか。この時晁蓋たちは、蔡太師の誕生日を強奪したことは「不是尋常小可公事（普通のどうでもよい事件とは譯が違ふ）」と考へて、「不免邀約楊志等十二人（やむなく楊志たち十二人を迎えて）」二十人で兄弟の契りを結んだということになっているのである。つまり、兩グループにかかわる地名をそのままつなげたのがこの地名であったということになる。とすれば、逆にいうと楊志は元來梁山泊と関わっていたわけではない可能性が高いことになる。

そして、『大宋宣和遺事』における誕生日の護送責任

者は、縣尉（どこの縣かは書かれていない）の馬安國である。『水滸傳』では楊志がこの役に当たっていることはいまでもない。『大宋宣和遺事』が『水滸傳』の原型であるとすれば、馬安國が楊志に入れ換えられたことになる。この事實と、先に見た梁中書のキャラクターが不自然であることを重ね合わせると、南宋における梁山泊物語が『水滸傳』へと展開していったおおよその道筋が見えてくる。

晁蓋・宋江を中心とする話、つまり生辰綱強奪と宋江の閻婆惜殺しを中心とするストーリーが存在し、これは梁山泊の物語、つまり宋江がどのようにして三十六人の首領となっていくかを語るものであった。この梁山泊の賊宋江の物語とは別に、太行山の賊楊志の物語が存在した。それは、楊志が花石綱の運搬に失敗して處罰される話と、將軍の前で武藝を披露して取り立てられる話を含む、太行山への落草と、招安を受けての官軍入りを語るものであった。「青面獸」はその物語（もしくはその一部）だったのであろう。そして、おそらく三十六人（その名前がはじめからそろっていたかは大いに疑問である）をそろえる必要上、一二つの系統

が一つにされたのが『大宋宣和遺事』段階であろう。そこでは、便宜上付け加えられた楊志の物語は簡略化されたらしく、武藝を披露する話などは記されていない。

その後には次のようなことが起きたのではなからうか。まず當然ながら二つの話が合體していることには無理があるため、物語は梁山泊系統、つまり晁蓋・宋江の方向へと一本化される。その過程で、太行山の方に名を連ねていた好漢には別の物語が與えられていったが、楊志だけはもとの物語を離れることはできなかった。そこで、花石綱の物語は背負った上で（『水滸傳』第二十回で楊志の身の上話としてその物語が語られ、續いて刀を賣ろうとして人を殺してしまう話になる）、馬安國のかわりに生辰綱の護送役に楊志が當てられることになったのであろう。そして、その間にはかつての太行山楊志の物語にあった演習における腕比べの物語が、司令官を梁中書に變更して無理に取り込まれ、楊志が護送役に當たる展開へとつなげるための手段とされたのであろう。

『醉翁談錄』に獨立した物語が見えた他の二人、「花和

梁山泊物語の成立について（小松）

尚」の魯智深と「武行者」の武松の名も『大宋宣和遺事』には見えるが、武松は三十六人のリストの中に名が見えるのみであり、魯智深は三十六人の最後に「那時有僧人魯智深反叛、亦來投奔宋江（その時、僧の魯智深も反逆して、やはり宋江のもとに身を寄せてきた）」ととつてつけたように述べろのみで、「反叛」の具體的内容も記されてはいない。おそらくこれは、三十六人の數をそろえるため、元來獨立した物語の主人公であった彼らが梁山泊のメンバーに取り込まれたことに由來しよう。それゆえに、彼らの物語は梁山泊（そして太行山）の物語を主として語る『大宋宣和遺事』には記されていないのであろう。一つには、別の物語を詳細に語る場ではないためと思われるが、魯智深への言及の仕方から考えれば、これらの人物をどのように梁山泊に結び付けるかはまだ固定していなかったのかもしれない。そして、特に魯智深についていえば、先に述べたように彼が五臺山に結び付けられていることから考えて、楊志同様に臨安の瓦市の主催者であった楊存中との關わりのもとに物語が發展した可能性が高いであろう。おそらくそれゆ

えに、『水滸傳』段階に至って魯智深は楊志とともに二龍山にこもることになる。『水滸傳』第十七回で魯智深がいうところによれば孟州（洛陽の北東）からほど遠からぬところ、つまり太行山の南端あたりにあるはずの二龍山が、第五十七回では青州（現在の山東省益都。梁山泊からは二百キロほど東になる）にあることになっている（ただし第十七回でも曹正は自分は「山東」に流れてきたといっている）という不可解な事實も、楊志・魯智深が太行山という一點において関わっていたがゆえに、兩人の話を太行山南端で合流させたものの、その後梁山泊の物語とつじつまを合わせるため、位置を山東に變えてしまったことに由來するものであろう。つまり、ことは『大宋宣和遺事』における「太行山梁山泊」と同様なのである。魯智深と關わりが深い李忠・周通の桃花山が同様に太行山付近から山東に變わっているのも、同様の現象であろう。そして、武松も二龍山の頭領とされる。『醉翁談錄』に見える三つの獨立した物語の主人公がみな二龍山に入り、まとめて梁山泊に合流するのは、彼らが梁山泊に参加する物語が元來存在しなかったこと

あらわれであろう。

七

このように、『水滸傳』は南宋で成立した梁山泊物語、具體的には『大宋宣和遺事』に見えるような晁蓋・宋江の物語を基本にして、まず楊志の花石綱關係の物語を取り込み、更に魯智深・武松の物語も付け加えるという形で發展していったものと思われる。前述したように、北方における梁山泊物語において壓倒的な存在感を持っていた李逵が、『大宋宣和遺事』においては名前が見えるのみで、具體的なことが一切記されていないのはそのためであろう。『水滸傳』になっても、李逵は「主要人物の中で獨立した物語を持たぬ數少ない人物の一人」<sup>⑤</sup>であって、宋江に付隨する役割にほぼ終始する。わずかに彼が獨自の活動を示すのは、『水滸傳』中で安定した梁山泊、つまり北方系梁山泊物語と同じシチュエーションを持つ第七十三・四回においてのことだが、この部分は、前にもふれたように元雜劇に基づいて後から付け加えられた可能性が高いものと思われる。

このことは、南北が統一された後、『水滸傳』がある程度成長した段階で、北方系の物語が取り込まれたことを意味するものであろう。

ただし、たとえば『録鬼簿』に「元代前期の俳優出身の雜劇作者紅字李二の「折擔兒武松打虎」という雜劇が著録されていることに示されているように、南北である程度共通した物語も存在したものと思われる。ただそれが、たとえば梁山泊の武松の物語として語られていたかは定かではない。當初の三十六人の名前が宋江しかわからない以上、武松であれ魯智深であれ、元々梁山泊の豪傑として認識されていたか否かは今となっては知る由もないのである。ただ、ある時期以降彼らの多くが南北双方で梁山泊のメンバーと認識されるようになったことは間違いない。

このようにして、南宋で『水滸傳』の原型が成立したとすれば、『水滸傳』に見える家屋の構造が南方のものであること、南方の地理については正確に記述されているのに對し、北方の地理は全くでたらめであることといったすでに指摘されている問題<sup>27)</sup>も説明が容易になるであろう。第四

梁山泊物語の成立について（小松）

十四回や第五十三回において、遼の領土であるはずの薊州に戴宗たちが赴くにも関わらず、全く別の國という意識が認められないのも、南宋においては山東も河北も金の領内であったことの反映と見るべきかもしれない。

やがて、おそらくは元末明初以降、『水滸傳』物語は充實して今日の姿に近づいていくことになる。その過程については別稿で詳しく論じたところであるが、本稿同様戯曲との関わりという点も含めて、まだ論ずべき點がいくつか残っている。それについては稿を改めることとしたい。

#### 註

① 『水滸傳』成立以前の梁山泊物語については、大塚秀高氏が「水滸説話について——『宣和遺事』を端緒として」（『中國古典小説研究動態』第二號（一九八八年十月））で「水滸説話」という名のもとに「大宋宣和遺事」との関わりを中心に論じられ、また笠井直美氏が「義賊」の誕生——雜劇『水滸』から小説『水滸』へ——（『東洋文化』第七十一號）「東京大學東洋文化研究所一九九〇年十二月」で雜劇との関わりを中心に論じられたところである。本論は、兩氏の説に依據しつつ、異なる觀點からこの問題を見ようとするもの

である。

- ② 宮崎市定「水滸傳——虚構の中の史實」(中公新書一九七二、後に「宮崎市定全集」第十二卷〔岩波書店一九九二〕に収録)第九章「宋江に續く人々」。
- ③ 甲集卷一「小説開闢」に「新話説張韓劉岳」と見えることは、この部分が南宋の状況を踏まえていることを示している。
- ④ 他に「公案」の項に「石頭孫立」「戴嗣宗」の名も見えるが、これらが梁山泊の孫立・戴宗と関係があるかは疑問視されている。
- ⑤ 小松謙「中國歴史小説研究」(汲古書院二〇〇一)第六章「楊家府世代忠勇通俗演義傳」「北宋志傳」——武人のための文學——。
- ⑥ 「張協狀元」には出・齣・折などの区分はない。ここでは錢南揚校注「永樂大典戲文三種」(中華書局一九七九)の區分による。
- ⑦ 余嘉錫「宋江三十六人考實」(「余嘉錫論學雜著」〔中華書局一九六三〕所收)。
- ⑧ 松浦智子「關於楊家將五郎爲僧故事的考察」(「明清小説研究」〔江蘇社會科學院文學研究所〕二〇〇九年四期)。
- ⑨ 對金戰が臨安の瓦市における藝能の主要な題材であったことは、前掲注③であれた「醉翁談錄」の記事からも見て取れる。

⑩ ⑤に同じ。

- ⑪ 以下「水滸傳」という場合は、すべて容與堂本をさす(底本としては、上海人民出版社から一九七三年に刊行された北京圖書館所藏本の影印本を使用する)。
- ⑫ 小松謙前掲書第五章「唐書志傳」「隋唐兩朝史傳」「大唐秦王詞話」「隋史遺文」「隋唐演義」「說唐全傳」——平話の存在しない時代を扱う歴史小説の展開——。
- ⑬ 小松謙「水滸傳」成立考——内容面からのアプローチ——(「中國文學報」第六十四冊〔二〇〇二年四月〕)。同論文は本論と相補う關係にある。「大宋宣和遺事」から「水滸傳」成立に至る過程に關する筆者の見解については同論文を参照されたい。
- ⑭ この點については、大塚秀高「中國小説史への視點」(日本放送出版協會一九八七)「7 短篇小説だった水滸傳——長篇小説の育たぬわけ」の「梁山にのほれなかつた豪傑たち」に指摘がある。
- ⑮ 小松謙「水滸雜劇の世界——「水滸傳」成立以前の梁山泊物語」(「水滸傳」の衝擊 東アジアにおける言語接觸と文化受容)〔勉誠出版二〇一〇〕所收)。
- ⑯ 續く第七十四回で李逵が壽張縣において知縣に扮して裁判をしたり、學校に亂入したりする場面も、今は失われた二つの雜劇、楊顯之の「黒旋風喬斷案」と高文秀の「黒旋風喬教學」に基づいている可能性がある。



- ①⑦ その種の黒族風物はすべて現存せず、詳細は不明である。
- ①⑧ この点については王利器『水滸』釋名』『水滸』是怎样纂修的(一)ともに『耐雪堂集』(中國社會科學出版社一九八六)所收)に指摘があり、その後高島俊男『水滸傳の世界』(大修館一九八七、後にちくま文庫二〇〇一)「十 講釋から芝居まで」でもふれられている。また中鉢雅量氏も『中國小説史研究——水滸傳を中心として——』(汲古書院一九九六)第Ⅱ部第二章「水滸傳の成立過程」においてこの點を論じておられる。
- ①⑨ 一部序列が異なる(たとえば『大宋宣和遺事』では最後尾にあつた晁蓋が第二位になっている)ほか、一部の名前や綽號の表記が異なる(たとえば柴進が柴俊となつている)が、張岑・杜千が入つていて解珍・解寶がいない點など、多くの特徴が『大宋宣和遺事』と一致する。
- ②① 小松謙『中國古典演劇研究』(汲古書院二〇〇一)Ⅱの第三章「脈望館抄古今雜劇」考。
- ②② 高島俊男前掲書「十 講釋から芝居まで」にこの點に関する言及がある。
- ②③ ①⑤に同じ。また筆者がこの論考を發表する以前に、笠井直美氏は注①で引いた論考で水滸雜劇をこうした特徴に即して論じておられる。
- ②④ 笠井直美氏は、前掲論文で「水滸雜劇では、梁山泊の好漢と結義した堅氣の人々は、一騒ぎおき、一命をとりとめ、親子夫婦團圓した後には、再び娑婆(一般人の世界)に還つて行くらしく見える」と指摘しておられる。
- ②⑤ 高島前掲書「十 講釋から芝居まで」にこの點についての指摘がある。
- ②⑥ 松村昂・小松謙『圖解雜學水滸傳』(ナツメ社二〇〇五)第2章「『水滸傳』物語の中から」の「二つの桃花山」「二つの二龍山」參照。
- ②⑦ 高島前掲書「五 人の殺し方について」。
- ②⑧ 宮崎市定『水滸傳と江南民屋』(文學)第四十九卷第四號(一九八一年)後に『宮崎市定全集』第十二卷に收録。北方の地理がでたためであることについては、小川環樹『中國小説史の研究』(岩波書店一九六八)第二章「『水滸傳』の作者について」の注(2)以來、多くの指摘がある。
- ②⑨ ①③所引の小松論文。
- 梁山泊物語の成立について(小松)